総力特集!! 第6回麻雀最強戦

麻雀の綾に安藤敗れる!!

～決勝戦観戦記～

稀にみる混戦となった決勝戦。だが紙一重の差で、勝利の女神は安藤に微笑まなかった…。

文 土井泰昭　イラスト／日高トモキチ

私は子供の頃、綾取りが嫌いだった。ここはこうして、次にああしてと筋が決まっているものを面倒そうに繰り返す作業がたまらなく嫌だったのである。

麻雀の綾は目に見えない。解いてみれば極めて簡単であったり、複雑極まりなく難解であったりして、それが魅力で、この手の作業は苦にならない。

この決勝の半荘は、東場では綾は簡単そうに思えたが、どうして、南場から複雑な絡みを見せて、超難解。誰が勝つのかオーラスを終えるまで予断を許さないレースとなった。

安藤は自分に使命を課していた

安藤満には意地があった。プロ否定宣言に対する異議を勝つことで示さなければならない使命を自分に課していた。決勝の相手は萩原聖人、飯田譲治、倉田てつを。芸能人相手なら情熱の差で圧倒できる。そう思いがちだが、しかし、三人の目が入っている。まさに異様な目だ。気合い、これに懸ける意気込み、どれをとっても安藤に劣らない。

「簡単には勝たせてもらえない」

これが安藤の第一感だ。

東1局。東家・萩原に好配牌が入った。（譜牌①）

当然 打だが、のシャンポンは歓迎できない。ここをどう捌くか。

そこへツモ。問題形は解消した。ぐっと良くなったが、反面、こういった一応筋に入ったもののツモ次第では選択を残す形は嫌なものだ。ミスを誘発しかねないからである。たとえばこれが、

を切っていれば、ツモで待ちのリーチが入っていたはずだ。あの好牌姿は結果として、ミスを誘発してしまったのである。

正解かミスか、結果を見なければわからない、そんな五分のところで明暗が分かれる。それが麻雀の面白さであり、深さでもある。

が出ないまま、飯田から追いかけリーチが入った。

から打のリーチ。待ちにとらず、シャンポンにとった。

「も危険度は同じ。ならば打っても安めのとした（がドラなので と想定すれば）」（飯田）

11巡目ともなれば必ずしもヤンメン有利とは限らない。ソーズがトイツ場になっていてスジ違いのシャンポンの方が有利になる場合もある。当局面はまさにそれ。鋭くスジ違いのシャンポンにとった飯田が萩原から8000点をアガった。

この局、安藤は第一打に。そして、と併せ打ち、受けの麻雀でスタート。勝機をじっと見据えているようだ。

流れは変わらない

さて、萩原にしてみれば、3巡目でを切っておけば、ダマなら ツモで絶好の手変わりがあったのに、など普通の神経ならそんな悔いが次局にも影響するものだが、持ち前の気風のよさか、それを感じさせない摸打で東2局も打でリーチ。

しかし、その宣言牌のに飯田がロンをかけた。

タンヤオのみの1300点。萩原がいかんともしがたい表情で点棒を払った。当然、これでへこたれる萩原ではない。

東3局、400・700をアガる。

失点を重ねたここでは、さすがに三色変わりを待った。

東4局は萩原のひとりテンパ

を重ねても牌勢が衰えない。こういった展開は2転3転が待っているものだが……。

一方、安藤は依然、受けの麻雀。倉田は手にならない。とにかく東場で一度もイーシャンテンが入らないのだ。

萩原VS飯田の流れはさらに南1局も変わらない。飯田が、

ピンフのみのテンパイ。と の振り替わりを待ってダ

▶牌譜①

東1局0本場 ドラ ウラ

東 萩原	25000 △1000(R) △8000 16000	配牌 ツモ 捨て牌 最終形 △リーチ
南 安藤	25000 25000	配牌 ツモ 捨て牌 最終形
西 飯田	25000 ＋8000 ＋1000(R) 34000	配牌 ツモ 捨て牌 最終形 リーチ ロン
北 倉田	25000 25000	配牌 ツモ 捨て牌 最終形

※△…テンパイ、☆…イーシャンテン、☆☆…リャンシャンテン、×…フリコミ